

第192回くらしの植物苑観察会 2015年3月28日(土)

-くらしのなかの信仰と植物-

吉村 郊子(国立歴史民俗博物館 研究部 助教)

人は、さまざまなかたちで植物とかかわり、その恩恵を受けつつ暮らしてきました。たとえば、植物は衣・食・住の素材や薬あるいは香料として用いられる他、生態系の循環においても重要な役割を担ってきました。また、庭や野山に生育する植物が、実質的・具体的な役割を果たしつつ、さらにはわたしたちの心を和ませてくれることもあります。このように人と植物の関係は実に多様ですが、この観察会では人と植物のかかわりを、“くらし”と“信仰”という側面から紹介し、話を進めていきたいと思えます。

日本では、古くは鑑真や弘法大師が信仰や医薬における植物の知識・素材などを海外から日本に持ち帰り、伝えたことで知られていますが、ここではそうしたスペシャリストによる行為ではなく、一般の人びとが日々のくらしのなかで営み、育んできた信仰と植物に関わる事例を取りあげたいと思えます。そして、さまざまな海外の事例も紹介しつつ、お話しします。

たとえば、アフリカの牧畜民ヒンバがくらす半乾燥帯は砂漠に隣接するような厳しい環境であり、そこに生育する植物は日本ほど多いとはいえません。そうした環境下では、

ひとつの植物種がくらしや信仰のさまざまな場面で重要な役割を果たし、多用されていました。



「オクルウォ」：牧畜民ヒンバの司祭はここで祖先に語りかけて、儀礼を行う。オクルウォはモパネの枝木を積みあげてつくられる。彼らにとってモパネは身近にあり、日常生活においても欠かせない植物である。

また、南アジア（インドなど）の伝統的な思想・哲学・医学的な考え方のもとでは植物は、“食－健康－信仰”という循環型の連鎖のなかで捉えられ、利用されてきました。そうした植物の多重的な役割・恩恵や、さまざまな文化における多様な人と植物のかかわりのかたちについて、みていきましょう。



「トゥルシ」（ホーリーバジル）
葉はお茶や料理に、茎は数珠の素材に用いられる。
抽出したオイルを使うこともある。

.....

次回予告 第193回くらしの植物苑観察会 2015年4月25日（土）
「日本の桜草栽培史」 山原 茂（浪華さくらそう会）
13：30～15：30（予定） 苑内休憩所集合 申込不要